裸の作者

南風　こまち

渦潮隼――といっても本名ではなくペンネームだが――は、真っ白な原稿を目の前にのんべんだらりとしていた。

部屋の隅に置いてあるスピーカーからは、何かの起爆剤になるだろうとお気に入りのミュージシャンの新曲が延々とリピート再生されている。

原稿の〆切は今夜０時だ。あと半日も残されていない。それなのに、何も天から降ってこない。

持ち主のアクションを待ちくたびれたデスクトップがスリープモードに入る。渦潮は諦めたようにゲーミングチェアから立ち上がり、リモコンを手にしてスピーカーの電源を切った。

ダラダラとツイッターを覗いていると、知り合いのライターがリツイートした賞の案内が流れてきた。『本日〆切、奮ってご応募下さい！』と無機質な黒ゴシックで書かれている。まさに今、彼の頭を悩ませている短編小説の賞だ。

大学を中退し、定職に就くわけでもなくパートで食いつなぐ日々。自分は社会に適合しないと分かり切っていても、そのまま本当に社会に向き合おうとしない者は稀だ。彼は、そんな稀な人間のうちの一人だった。

今は遠い学生時代、渦潮は文芸サークルに加入していた。物書きだからみんな似たようなものだ、と彼は高を括っていた。慢心である。季刊に合わせて毎回毎回作品を出す者、たまにしか作品を出さずとも毎度素晴らしい作品を出す者、大長編の連載をやり遂げた者……渦潮はそのどれでもなかった。彼は段々と埋没し、やがて大した作品を出すこともなく、ひっそりと消えていった。

一発逆転、起死回生。

時は流れ、彼が賞の案内を目にした時、そんな四字熟語が浮かんだ。

これだ、と。

しかし、自らの埋没に危機感を抱くこともなく、中途半端にフェードアウトした身だ。今更何を書こうとしたところで、ぶよぶよと心身を覆う慢心が何をするのにも邪魔をした。

学生時代、サークルに量産作家タイプの友達がいた。彼女は言った。書き続けないと腕がなまる、頭が錆びつく、と。書き始めることすらろくにできなかった渦潮は、今もまた踏み出せずにいる錆と脂肪の塊に過ぎなかった。だからこそ、大博打に打って出ようとしていたのだ。

しかし、今のままでは賭博場に出ることすらままならない。

ぼけっとしているうちに陽がだいぶ傾いていた。いよいよ時間が無い。

まあ、いいか……渦潮の心中に巣食った怠惰が、彼をのろのろとベッドに向かわせる。ごろりとうつ伏せ寝になって、スマホゲームの周回を始めようとした。今日のログボは何だろうか。

しかし、邪魔が入った。

少しかすれたインターホンの音が、埃っぽく汚い部屋に舞い込んだ。セールスだろうか。渦潮は胡乱な目を玄関に投げ、渋々とベッドから身を剥がした。

「はい」

今日初めて声帯を使うものだから、インターホンと同様にかすれた第一声が出た。

「こんにちは。渦潮隼先生のお宅でしょうか？」

彼はぎょっとして、第二声を出せずに口をぱくぱくさせた。自分のペンネームを知っているのは学生時代の友人くらいで、それも片手で数えるほどしかいない。今、

ドアの外にいる人物の声は、そのどれにも当てはまらなかった。
恐る恐るドアを開ける。西陽で朱色に染まった男が立っていた。まるで見覚えのない人物だった。
「こんにちは。私、小説執筆支援会の大巻と申します」
セールスっぽい前口上が始まったが、それにしても渦潮にしてみればあまりに不気味だった。あれよあれよというちに、気が付いたら男を部屋に上げ、椅子に座らせ、コップに入れたコーヒーを出していた。そうしなければいけない、と思わせるような何かが大巻と名乗る男にはあった。
「渦潮先生は現在、翔雀賞への原稿をすすめていらっしゃるかと存じます。進捗はいかがですか？」
渦潮は腰を抜かしそうになった。
「あんた、何者なんですか」
「嫌ですねえ、小説執筆支援会の大巻ってちゃーんと書いてあるじゃないですか、ほら」
名刺にはそう書いてある。というか、それしか書いていない。
「で、どうです？　いい作品は書けそうですか？」
渦潮は口ごもり、たらこのようにぼってりした唇を噤んだ。しかし、大巻にはそれが十分答えだったようで、ふっと薄い笑いを浮かべた。
「だいぶ難産のようですね」
大巻は薄い唇の隙間から猫なで声でそう言い、鞄の中から何かを取り出した。
「そんな渦潮先生に、こちらをご用意しました」
小さく無機質な音を立てて机に置かれたそれは……白っぽいＵＳＢメモリだった。
「何ですか、それ」
「そうですね……強いて言うならば『勝利』でしょうか」
まるで答えになっていない返しだが、大巻はけろりとした顔でメモリの蓋を開けた。鈍い銀色のアダプターが姿を現し、斜陽に照らされてざらついた光を放つ。
「こちらをご覧ください」
かちゃり、と音を立ててメモリが大巻のパソコンに接続される。中に入っているのはワードファイルが一つだけ。タイトルは……。
『『愚か者には読めない小説』？」
大巻はにんまりしながら頷き、ファイルをダブルクリックした。
「渦潮先生、あなたになら読めるはずです。そうでしょう？」
彼の中の慢心、いや、それを内包した虚栄心は、それが実を結ぶことはなくとも、人一倍虚栄への近道には敏感だった。
しかしそれは、現実に対してあまりに鈍感であることの裏返しでもあった。
彼の目は――正確には、目やにのこびりついた彼の目だけは正直だった。馬鹿正直に、何一つ文字の刻まれていないファイルを、完全に空白と認識していた。
「これは……？」
それが現実である。
「あなたにも、いや、あなたなら読めるでしょう？」
つまり、渦潮には現実が読めなかった。
「どうです、素晴らしい作品でしょう」
彼には、作品が読めたのである。
いや、そう言い聞かせるしかなかったのかもしれない。
「おお……いや、これは素晴らしい作品だ、まだ冒頭しか目を通していませんが、今まで読んだどんな作品よりも纏っているオーラに威厳がありますね」
「そうでしょうそうでしょう」
大巻はにまにま笑いながら、ますます猫なで声を甘ったるくする。
「これなら翔雀賞も十分に狙える、いや、もはや賞はあなたのものですよ」
「なるほど……」
渦潮ははやる心を抑えながら、喉から出そうになる手をぐっとこらえながら、こう続けた。
「しかし、なぜこれを俺に？」
「なに、理由はそう難しいものではありません。あなたには才能がある、なのに社会がそれを感知しない。小説執筆支援会は、そんな埋もれた才能を社会にはばたかせるお手伝いをするためにあるのです。あなたは我々のお眼鏡にかなった、というわけです」
そう言われると、渦潮も悪い気はしなかった。
才能がある、と認めてくれる人にはしばらく会っていない。その甘い言葉は、彼にとっては度が過ぎた恵みの雨のようなものだった。
「あなたは選ばれるべき存在です。ここで一度、それを社会に向かってはっきりさせませんか？」
渦潮は両手で机を叩き、勢いよく立ち上がった。
「そうだ……俺には才能があるんだ。なのに、なのに！誰もその才能を見ようとしなかった、掘り起こそうとしなかった」
虚栄は時に、傲慢と親密だ。
「おっしゃる通りです。我々もそのような社会を憂いて活動を開始したのです」
大巻は毛ほども表情を変えずにファイルを閉じ、メモリをラップトップから抜く。かちりと蓋を閉め、そっと

渦潮の方に滑らせる。
「一度賞を取ってしまえば、そこから社会はあなたに目を向けてくれます。そこからが本番です。このメモリは、入口に過ぎません。なに、愚か者にはこの作品は読めません。読める人は必ずあなたの才能に気付きますよ」
渦潮はメモリに手を伸ばす。ぞっとするほど冷たいそれを、自分のデスクトップの前に置く。大巻は立ち上がり、そろそろおいとましますと言った。
渦潮は玄関先まで大巻を送っていった。
「では渦潮先生、頑張ってください。期待していますよ」
「ええ」
大巻は青白い手を差し出した。握手をすると、ひやっとした感触に渦潮の肩がびくりと震える。
「それでは、お邪魔しました」
大巻はドアを開け、消えていく。陽はとうに落ち、辛うじてその残滓を夜空の足元に残しているだけだ。
渦潮はのそのそとデスクトップの前に戻り、白いメモリを差し込む。すぐにフォルダが現れ、唯一のファイルをダブルクリック。
何度見ても真っ白だ。渦潮にも、大巻にも、いや、誰にも読めるはずがない。
「読める……読めるぞ……！」
渦潮は薄汚れた眼鏡の奥から、ぎらぎらと文章を目で追っていった。そこまで長くない作品で、小一時間ほどで読み終えてしまった。
何度読んでも素晴らしい作品だった。短編であるとは思えないほどの奥行と重厚感、それでいて軽妙洒脱な文章と好奇心を虜にする展開。
俺は、作品に選ばれたのだ。
渦潮はそう思い、翔雀賞の応募ページを開く。
『ファイルを選択しアップロードしてください』
慢心と虚栄、そして傲慢のキメラは躊躇うことなく、空白を提出した。